

学生相談室における学生の主体性を育む グループプログラムの取り組み

濱田 さつき¹⁾ 金子 留里²⁾ 松高 由佳³⁾

Descriptions of the Group Programs to Foster Student Autonomy in a Student Counseling Room

Satsuki Hamada Ruri Kaneko Yuka Matsutaka

1. はじめに

広島文教女子大学（以下、本学）の学生相談室では、平成26年度より予防・啓発活動の一環としてグループ活動に取り組み、その活動内容は、学生状況に即した支援を模索しながら毎年改善を行っている。

初年度および2年目においては、コミュニケーションに主眼を置いたグループプログラムに注力してきた（濱田ら、2016）。コミュニケーションシリーズの展開やコミュニケーションを意識したゲームを導入するなど工夫を重ねたが、実施の中で、学生がスキルや相手を強く意識するあまり、受け身の姿勢や話題が広がりにくい場面が見受けられた。また、参加者数の確保の問題から集団討議に苦手意識のある学生は、プログラム自体に参加しにくいことや情報が学生に行き届いていない可能性が予測された。プログラム内容の改善及びグループの種類の実質化、開催時期、広報の在り方が課題として挙げられた。時を同じくして、本学学生相談室では、学生を対象とした学生相談室の利用に関する意識調査を実施している（濱田ら、2016）。その中で、利用したい活動内容に活動系

を選択した者が全体の43.6%を占め、体験型グループプログラムのニーズを確認することができた。

そこで、3年目となる平成28年度はコミュニケーション活動以外に体験型のグループプログラムを新たに取り入れ、活動内容の幅を広げたプログラムを展開した。具体的には、①第1弾：話してスッキリコミュニケーション講座～キャンパスライフに楽しさを～（2回連続）、②第2弾：わくわくコミュカUP講座（2回連続）、③第3弾：学生相談室・学生共同企画 クリスマス会 with コラージュ（1回）、の3つの活動である。その際、ただ単にプログラムの種類を増やし実施するのではなく、近年、高等教育に求められている「主体的に考える力の修得」（中央教育審議会、2012）に繋がるプログラム作りの工夫を試みた。つまり、個々の活動が主体的に考える力の修得に向けた発展的内容としたのである。図1は、体験のプロセスを3ステップで示したものである。

本稿では、上述の経緯を基に取り組んだ3年目のグループ活動について報告し、今後の活動に向けた資料とする。

2. 概要

2.1 プログラム実施概要

H28年度の実施概要は、表1の通りである。1回のセッションは、授業スタイルに合わせ、90分間

1) 広島文教女子大学学生サポートセンター助手

2) 広島文教女子大学地域連携室長

3) 広島文教女子大学心理学科准教授

とし、コミュニケーションのグループプログラムについては、今年度も2回連続シリーズとした。そのため、企画は3つであるが、実施回数は5回となる。対象者は、本学在学学生である。参加者は、その都度募集する形式とし、定員は10~12名で設定した。場所は、心理教育相談センター2階で実施した。ファシリテーターは、コミュニケーションの活動は2名（うち、1名は臨床心理士）で、体験型の活動は1名（臨床心理士）で対応した。

2.2 改善点

平成28年度の改善点を以下に示す。

- 1) 開催時期：学生相談室の利用状況や学内行事に合わせた開催への変更（第1弾）

今年度の前期グループプログラムの開催は、次に述べる2点の理由から、前年度の7月上旬から1か月前倒しの6月に設定した。まず、本学学生相談室の利用状況のピークは6月のため、学生生活における問題や悩みが表面化しやすい時期に合わせたことである。そして、7月は前期末試験に向けたレポート課題の提出や試験勉強等に追われ、学生のスケジュールが過密になるためである。

- 2) 広報：過去の利用学生のコメント掲載や目立つ場所への掲示による認知の拡大
募集方法のポスターやチラシに過去の利用学生のコメントを掲載し、気軽に参加しやすい広報づくりに改良した。また、校舎1階の出入り口に立

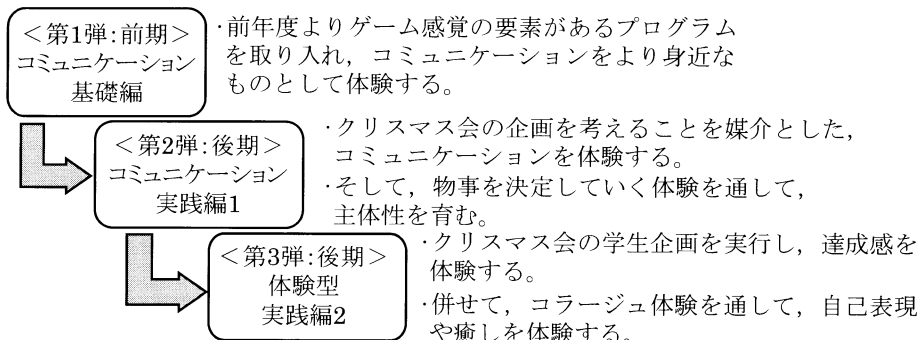


図1 主体的に考える力の修得に向けたグループ体験3ステップ

表1 H28年度グループプログラム実施概要

時期	講座名	回	開催日時	テーマ	目標	ゴール	延べ人数
前期	【第1弾】話してすっきりコミュニケーション講座～キャンパスライフに楽しさを～	1	6月1日、90分	新しい出会い	集団での作業を通して、人と抵抗なく話せる体験をする	自分も人と案外話せるんだな、と感じる	6名
		2	6月8日、90分	私の人との関わり方について考える	人の話を聞くこと、人の話を理解することをゲームを通して知る	私は人どんなコミュニケーションをとっているのか、振り返る	5名
後期	【第2弾】わくわく コミュカUP講座～ステップアップ編～	1	10月28日、90分	再会 そして 私が参加したいクリスマス会を考える	自分の思いを他人に伝える、相手の話を聞ける作業を通して、合意形成の体験をする	仲間と一緒に案を考えて、みんなで楽しいことができたらしいな、という気持ちになる	4名
		2	11月11日、90分	クリスマス会に向けた企画を考えよう	前回合意した企画案を振り返り、仲間と話し合いながらより具体的な中身を考える	クリスマス会に向けて、自分にも何かできそうだ、という気持ちになる	2名
後期	【第3弾】学生相談室・学生共同企画 クリスマス会 with コラージュ	1	12月16日、90分	クリスマス会	ゲームを介して、互いに知り合う体験をする。そして、コラージュにて、思いの私を表現する	仲間と一緒に過ごすクリスマス会も楽しいな、という気持ちになる	5名

て看板を設置し、学生の教室移動の際にポスターが視界に入りやすくするなどの認知の拡大を図る掲示の工夫も行った。

3) アンケート内容：質問項目を目標設定に関連づけた内容に修正（第2・3弾）

これまで、受講後アンケートの質問項目を「満足度」、「役立ち度」、「意思の伝達度」、「新たな気付きや学び度」の4つの視点から実施してきた。質問項目を統一することで、同一視点からのそれぞれの効果の割合を縦断的に把握することは可能であったが、実施者側が毎回設定した目標に対する達成度の確認までは至らずにいた。そこで、後期のグループプログラムからは、企画の目標設定に関連付けた質問項目に修正し実施した。例えば、第2弾「わくわくコミュニケーションUP講座」では、目標の一つである「合意形成を体験する」に対応する質問項目として、「企画に向けて、みんなで合意できたと感じましたか」とした。

4) 第1弾セッション計画：ゲームを二段構成にし、人との距離感を知る体験を重視

ゲームによるコミュニケーション体験のプログラムは昨年度より導入しているが、主にセッション計画の前半に限定していた。平成28年度は、サブタイトルの「キャンパスライフに楽しさを」を前年度よりも活かした内容に改善することにした。具体的には、ゲームをセッション計画の後半

時間	内容	準備物・注意	実施状況
10	【1】「ペアコミュニケーション」 話題について話す。 □今日の朝ごはん(1分) □最近ハマっていること(1分) □私のストレス発散方法(2分)	「話題」を書き出した用紙(3枚)	二人一組で座る
20	【2】「ペーパータワー」 チームになるためのレッスン ① 2グループにわかれる。 ② 新聞紙5日分(×2)を渡し、新聞紙を使ってグループで紙の塔を作ってもらおう。 ③ 最初に相談時間を設ける(3~5分)。 ④ グループで塔を作り(5~10分)、高さを競う。 ⑤ やってみてどうだったか「体験を振り返り」をする。	教示を書き出した用紙 留意点：その間は、新聞紙に触れてはいけない。 シェアリングをして、それぞれ感じたことを分かち合う	2グループに分かれる 輪で座る(サークル型)

図2 第1弾1回目(6/1)：トピック「人と話をする」のセッション計画表

にも取り入れ、二段構成で人との距離感を楽しみながら縮められる体験を重視した点である。その内容を図2・3に示す。まずは、1回目(6/1)、2回目(6/8)ともにペアコミュニケーションゲーム(昨年度より導入)で、一人の人と知り合う体験をする。そして次に、グループサイズを3~4人程度の小グループに切り替え、今回新たに導入した「ペーパータワー」と「クイズ」のコミュニケーションゲームを通して複数人との距離感を知る二段構成である。前者の「ペーパータワー」は、グループで協力し合いながら新聞紙で高い塔を作るというチームになるためのレッスンである。後者の「クイズ」は、グループの1名が予め用意されているお題(例：パンダ、かき氷、団扇)の中から一つ選択し、他の参加者は、お題の答えを質問しながら導き出すというゲーム内容である。ここでは、想像力と相手の話を聞いているか、相手が理解しやすいように話をしているのかの3点が重要となる。

5) 第2弾セッション計画：学生との共同企画という形でコミュニケーションを図るプログラムの試み

前年度の第2弾のコミュニケーションプログラムのテーマは、「会話の行き違いを考える」であった。今年度は内容を大幅に見直し、次項で述べる12月に開催予定のクリスマス会(カラー

時間	内容	準備物・注意	実施状況
10	【1】「ペアコミュニケーション」 話題3つを示す。 □タベのご飯(1分) □先週の感想(1分) □参加理由(2分) □ポイント：コミュニケーションをとる際の意識付けを行うこと。	「話題」を書き出した用紙(3枚)	二人一組で座る
20	【2】「クイズ」 <進め方>①お題を決めて、それが何なのか質問をして、答えを探すゲーム。「それは○○ですか? <はい、いいえ>を繰り返して、考えて一つの答えを導き出す。 □工夫：例を提示し、理解しやすくする。 □ポイント：想像力と相手の話を聞いているかが重要。	「お題」のイラスト用紙(7枚) 【例】りんご 【お題】 ①ネコ、アイスクリーム、扇風機 ②パンダ、かき氷、団扇	輪で座る(サークル型)

☆ 意図開き

図3 第1弾2回目(6/8)：トピック「コミュニケーションゲーム」のセッション計画表

ジュ体験)に向けたプランを学生と考え、実践してみる企画を考えた。つまり、学生相談室と学生の共同企画である。実際には、学生相談室がコラージュ体験などの責任を持つ部分以外について学生に案を考えてもらうことにした(図4・5)。主体的に考える力を修得する上でファシリテーターが配慮した点は、いきなり具体案を学生に提案してもらうのではなく、まずクリスマス会のイメージやこれまで体験してきたことをブレインストーミング(Brain Storming:BS法)の手法で自由に出し合うことである。そして次に、当日のクリスマス会の企画の内容にしたいものに的を絞る意見を出し合うが、ここでは、現実可能性の有無や質よりも量を重視し、「こういう企画をしたい」という学生の思いや意見を尊重した。そして、当日与えられた枠を考慮しながら、案をさらに磨き上げていく作業をみんなで話し合いながら決定していくプロセスを経た。

6) 第3弾セッション計画:クリスマス会とコラージュ体験の導入及び学生との共同企画の実行
今年度初めて取り組む第3弾は、体験型グループプログラムとして、表現療法の一つであるコラージュを取り入れることにした。コラージュは、写真や絵・文字などを雑誌などから切り抜いて、台紙に自由に貼り付けるものである。その制作を通して自己を表現し、自己理解を深めることが可能とされている。また、グループで実施すること

は、作品の感想をシェアリングしたり、協働して作品を作ることに教育的意義があるとされており(日本学生相談学会, 2010)、多くの学生相談機関で導入されている所以の一つと考えられる。本学学生相談室では、クリスマス会と組み合わせ、学生との共同企画として年間プログラムの最後に実施した(図6)

時間	内容	準備物・注意	実施状況
5	<p>【企画の概要】</p> <p>① 学生相談室が行う誰でも参加できる企画であること。</p> <p>② 日時:12月16日(金)4コマ目(16:30~18:00)</p> <p>③ 場所:心理教育相談センター2階</p> <p>④ 内容:コラージュ作品(45分)+残り45分(企画部分:30分) →コラージュの説明をする。</p>	模造紙、マーカー、茶菓子、コラージュ作品、教示等を書き出した用紙	1グループ
15	【クリスマス会と言えば】どんなことをしてきましたか?(プレスト)	出てこない場合は、例えば、「知り合うゲーム」とか「おやつ時間」とかあるよね。	
15	【私がやりたいことは?】今回の企画の内容にしたいものは?	出来そうな中身って何だろう。	
15	【当日の内容を決める】		

図4 第2弾1回目(10/28):トピック「クリスマス会を考えよう」のセッション計画表

時間	内容	準備物・注意	実施状況
10	<p>【1】企画の概要の説明と前回までの決定事項を振り返る</p> <p>① 企画内容、日時、場所、コラージュ、時間配分の説明</p> <p>② 前回、学生から出た企画内容を振り返る。 ☞ゲーム、わいわいする(しゃべる)、お菓子、料理をかこむ、</p>	模造紙、マーカー、茶菓子、コラージュ作品、教示等を書き出した用紙	1グループ
35	<p>【2】学生企画で出来そうな内容は?</p> <p>① タイムスケジュールを提示。</p> <p>② 前回参加者から出された「ゲーム」と「茶菓子」について、話題を提供する。</p> <p>③ イメージしやすいように、ゲームについては、これまでグループワークで体験してきたゲームを紹介する。</p> <p>④ 今回の企画の内容にしたい「ゲーム」や「お菓子」について、話し合う。</p>	<p>【当日のタイムスケジュール:案】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挨拶とプログラムの説明(5) ・自己紹介(5) ・ゲーム(学生企画部分) ・コラージュ作品作り(45) ・飲食(学生企画部分) ・振り返りと一人ひと言(5) <p>・ピクニックバスケット</p> <p>・ペーパータワー</p> <p>・共通点を探せ</p> <p>・クイズ</p>	
5	【3】【当日の内容を決定する】今後のクリスマス会に向けたお手伝いの協力については、強制にならないように、興味関心があれば程度に案内を行う。	留意点:「YES」か「No」で返答するような問いかけではなく、どんなものでも、メンバーから出てきたものを重視するやり方を心掛ける。	

図5 第2弾2回目(11/11):トピック「クリスマス会の具体的な中身を考えよう」のセッション計画表

学生相談室・学生共同企画

学生相談室主催 第3弾!

2016 12/16 FRI

参加費無料

今回、学生相談室と学生との共同で、「クリスマス会」を企画しました。学生が考えたゲームや茶菓子でホッとひと息つきながら、コラージュ(写真や絵・文字などを雑誌などから切り抜いて、台紙に自由に貼り付けるもの)を制作してみませんか? 思い思いの私を表現して、気分転換しましょう。どうぞ気軽にご参加ください!

時間 16時30分~18時(5コマ目)

場所 心理教育相談センター2階
(保健棟後ろの階段、外階段で2階に上ります)

対象 コラージュ制作に意欲がある人、どなたでも

定員 10名(先着順)

進行役 斎田(学生相談室)

締切日 12月13日(火)

図6 第3弾(12/16):クリスマス会のポスター

2.3 参加者の特徴

H28年度の参加者実人数は9名であり、1回の参加人数の平均は4.4人であった。(表1・2)。今年度の参加学生の特徴としては、1・2年生といった低学年の学生が全体の8割近くを占めており、予防という観点から実施者側が想定した学年が多く参加していることが分かった。また、昨年度から継続参加している学生は9名中3名(33.3%)、今年度から新規で参加した学生は6名(66.7%)と、新しく参加した学生が全体の7割近くを占めていた。

表2 参加者 (実人数)

学年	人数	割合
1年生	3	33.3%
2年生	4	44.4%
3年生	1	11.1%
4年生	1	11.1%
	9	100.0%

※割合は、参加者数に対する比率を示す。

3. アンケート結果と考察

本項では、アンケート内容の見直しを行った第2弾1回目の「再会 そして、私が参加したいクリスマス会を考える」と第3弾の「クリスマス会 with コラージュ」の実施後アンケート結果について述べる。倫理的配慮としては、回答は無記名式であり、調査への参加は任意であること、不参加により不利益が生じることはないことを紙面に明記し、口頭でも説明を行った。なお、回答者数が少ないため、考察は参考程度にとどめる。

設問の構成は、以下の通りである。各設問について、「とてもそう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の5段階評価で、設問6・10・12は、自由回答法で尋ねた。

3.1 第2弾第1回目 (実施日：10月28日)

3.1.1 目標

- 1) 互いに知り合う。
- 2) 自分の思いを相手に伝える、相手の話を聞ける体験をする。
- 3) 合意形成を体験する。

3.1.2 アンケート結果

設問1 顔と名前が一致する人は増えましたか

表3 顔と名前が一致

	人	%
とてもそう思う	2	50.0
まあそう思う	1	25.0
どちらともいえない	1	25.0
あまりそう思わない	0	0.0
全くそう思わない	0	0.0

※率は、参加者数に対する比率を示す。

設問2 自分の考えやアイデアを相手に伝えることはできましたか

表4 考えを伝える

	人	%
とてもそう思う	0	0.0
まあそう思う	3	75.0
どちらともいえない	1	25.0
あまりそう思わない	0	0.0
全くそう思わない	0	0.0

※率は、参加者数に対する比率を示す。

設問3 他のメンバーの考えやアイデアを聞くことはできましたか

表5 考えを聞く

	人	%
とてもそう思う	2	50.0
まあそう思う	1	25.0
どちらともいえない	1	25.0
あまりそう思わない	0	0.0
全くそう思わない	0	0.0

※率は、参加者数に対する比率を示す。

設問4 企画に向けてみんなで合意できたと感じましたか

表6 みんなで合意

	人	%
とてもそう思う	0	0.0
まあそう思う	2	50.0
どちらともいえない	2	50.0
あまりそう思わない	0	0.0
全くそう思わない	0	0.0

※率は、参加者数に対する比率を示す。

設問5 その他に、新たな気づきや学んだことはありましたか

表7 新たな気づきや学び

	人	%
とてもそう思う	1	25.0
まあそう思う	0	0.0
どちらともいえない	3	75.0
あまりそう思わない	0	0.0
全くそう思わない	0	0.0

※率は、参加者数に対する比率を示す。

設問6 何でも自由にお書きください

- ・楽しいクリスマス会になりそうだなと思った。

3.2 第3弾 クリスマス会 with コラージュ

3.2.1 目標

- 1) ゲームで互いに知り合う。
- 2) コラージュを通して、自己表現を体験する。

3.2.2 アンケート結果

設問7 ゲームを使って自己紹介できましたか

表8 ゲームを使った自己紹介

	人	%
とてもそう思う	2	40.0
まあそう思う	1	20.0
どちらともいえない	2	40.0
あまりそう思わない	0	0.0
全くそう思わない	0	0.0

※率は、参加者数に対する比率を示す。

設問8 コラージュでは、自分の思いを自由に出すことはできましたか

表9 コラージュ（自己表現度）

	人	%
とてもそう思う	1	20.0
まあそう思う	3	60.0
どちらともいえない	1	20.0
あまりそう思わない	0	0.0
全くそう思わない	0	0.0

※率は、参加者数に対する比率を示す。

設問9 作品の仕上がりには満足していますか

表10 コラージュ（満足度）

	人	%
とてもそう思う	1	20.0
まあそう思う	3	60.0
どちらともいえない	0	0.0
あまりそう思わない	1	20.0
全くそう思わない	0	0.0

※率は、参加者数に対する比率を示す。

設問10 コラージュを体験して気付いたことがあれば、自由にお書きください

- ・なかなか写真を決められず、優柔不断な所があった。
- ・他の人の作品が見れて楽しかった。
- ・切るのも楽しかった。
- ・みんなセンスがいいなと思った。
- ・自分に向いていると思った。
- ・時間が足りなかった。
- ・作品を作るのは楽しい、紙を切ったり、貼ったりするのは楽しい。

設問11 今度も体験型のグループプログラムがあれば、参加してみたいと思いますか。

表11 体験型プログラムの参加の有無

	人	%
とてもそう思う	1	20.0
まあそう思う	4	80.0
どちらともいえない	0	0.0
あまりそう思わない	0	0.0
全くそう思わない	0	0.0

※率は、参加者数に対する比率を示す。

設問12 何でも自由にお書きください

- ・参加して楽しかった（3人）。
- ・ゲームなどコミュニケーションが取りやすく、面白かったです。

第2弾第1回目のグループプログラムの目標は、互いに知り合うこと、自分の思いを相手に伝え、相手の話を聞けること、そして合意形成を体験するの3点であった。まず、設問1の顔と名前が一致する人が増えたかの問いについては、4人中3

人(75.0%)が「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答し、1人(25.0%)については「どちらともいえない」と回答した。今セッションの参加者は、全員が過去のグループプログラムの参加経験者であるため、既に知り合い同士もいた。そのため、全員を知っている可能性もあり、「増えましたか」という問いに、判断がつかない場合も推察された。次に、相手の考えを聞いたり、自分の意見を伝えることができたと回答した者は、「とてもそう思う」「まあそう思う」の項目を合わせて3人(75.0%)であったが(表4・5)、企画の内容について合意できたと実感した者は、2人(50.0%)と半数であった(表6)。残りの2人は、「どちらともいえない」と判断しかねる回答を示した。今回のグループの規模は、小グループに属する。4人という人数は話し込むのに丁度よく、アットホームでありながら多様性がでてきやすいことから、企画や提案をまとめるには向いているとされている(中野, 2003)。しかし、意見や考えを伝える力には個人差があること、合意形成にいたっては目的に向かい互いが歩み寄るプロセスを経ることから、消極的な学生の場合はその場の雰囲気や他者の意見に流された可能性は否めないと思われる。

第3弾は、学生との共同企画であるクリスマス会のセッションであった。ゲームを使った自己紹介やコラージュによる自己表現や満足度において、5人中3~4人(60.0~80.0%)が、「とてもそう思う」「まあそう思う」の項目を回答している点、そして設問10・12の自由記述の感想から総合して、概ね好評だったのではないかと推察された(表8~10)。今回のコラージュ体験では、1名の学生において、自己表現度や満足度の回答を、「どちらともいえない」「あまりそう思わない」の項目を選択していたが、設問10のコラージュを体験して気付いた点として「時間が足りなかった」と回答していることから、今回は作品の完成度と時間とのバランスが上手く掴めなかったようである。最後に、今後の体験型の活動については、全員が今後も同様のプログラムがあれば参加したいと考えていることがわかり、ニーズの確認ができた(表11)。

4. 学生との共同企画による二次的効果

今回初めて、学生との共同企画を試みた。実施者側は、計画段階では企画の一部を考えてもらい、グループプログラムの範囲内での関わりを想定していたが、試行として、第2弾のプログラム終了時にお手伝いの協力の案内を行った(図5)。すると、数名の学生がグループプログラムの時間外にクリスマス会のゲームの中身を考えたり、クリスマス会の事前の買い出しや当日の会場設営および後片付けと、対応出来る範囲内で進んで引き受けてくれた。共同企画という形でコミュニケーションを図ることにより、上述のような主体的行動として現れ、二次的効果を実感した。企画の一部を発案し、実行に移すことで、学生の中に企画者の一人であるという意識が芽生え、より主体性を発揮させたのではないかと推察された。

5. まとめと今後の課題

以上、平成28年度のグループプログラムの取り組みについて述べてきた。今回の取り組みから得られた今後の課題を以下に挙げていく。

5.1 プログラム内容の充実化

今回は新たなプログラムの導入として、コラージュを実施したが、今後はその他の体験型や心理テストを活用した自己理解のワークなど、プログラムの種類をより充実させていくことを検討していきたい。高石(2009)は、五感を使った心理教育的グループプログラムを企画・提供してきた経験から、「言葉『以前』の体験を、守られた場・安心できる関係性のなかで積み重ねていくによって、学生のところに身体的実感や情動とつながった『主体性』を育てていく支援が必要」と述べており、今後本学学生相談室に求められる役割の一つと考えるからである。

5.2 プログラム形態の検討

今年度の企画としては3つであるが、コミュニケーションのプログラムが2回連続シリーズのため、実質5回のグループプログラムを実施した。2回連続の場合は開催間隔が短いこともあり、昨年度と同様に参加者各々の事情(アルバイト等のキャンパス外活動や学内イベントに参加)により、

2回連続での参加が難しい状況が生じ、改めて課題として残った。学内行事に加えて、学生の生活実態にも照らし合わせたプログラム形態の工夫が求められる。例えば、連続シリーズの企画でも、2週連続ではなく月1回の開催にするなどの工夫である。また、毎月一つの企画を開催するのも一つの案だろう。その場合、前述で掲げたプログラム内容の充実化にも着手可能となるため、試みるメリットはあると考える。

5.3 参加者数の確保に繋がる在り方の検討

参加者数の確保の問題は、昨年度も課題として示され、今年度は過去の参加者のコメントを掲載したり、看板を目立つ場所に設置するなど工夫を凝らした。しかし、今年度の1回あたりの参加者数の平均は44人と、実施側の意図した参加者数の増加に繋がるものではなかった。今後は、広報の在り方だけに限らず、興味・関心を引き出せるような企画の内容や開催時期など、多方面から検討していく必要があるだろう。

5.4 ファシリテーターのアプローチの工夫

ファシリテーターは、各々が感じた意見を尊重し、企画にどうつなげていくのかという橋渡しの役割を求められているが、第2弾のグループプログラムにおいて、合意形成を感じた学生が半数であった点から参加者への配慮の観点や意見を引き出す工夫の検討を含めて、今後の課題としたい。

以上、平成28年度のグループプログラムの取り組みについて振り返り、検討を行った。グループを対象としたプログラムの最大の魅力は、共通の関心事やテーマをきっかけに、学生が学年・学科

の垣根を越えて、自由に集い交流することで、他者や自己理解を深めることを可能とする点であろう。今後もグループ活動の改善を試みながら、学生支援の発展に寄与していきたい。

【謝辞】

グループプログラムを実施するにあたり、ご支援・ご協力いただきました本学教職員の皆様により感謝申し上げます。

【文献】

- 濱田さつき・金子留里・松高由佳 (2016). 学生相談室におけるグループプログラムの試み 広島文教女子大学心理臨床研究, 6, 34-43.
- 濱田さつき・松高由佳・上利学・坂井晶子・徳本達夫・戸松美紀子・朱本稚子・田口礼子・光末洋一 (2016). 学生相談室における支援活動の現状と課題 広島文教女子大学高等教育研究, 2, 97-106.
- 文部科学省 (2012). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf (2017年1月7日確認)
- 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会 (2010). 学生相談ハンドブック. 学苑社
- 中野民夫 (2003). ファシリテーション革命. 岩波アクティブ新書
- 高石恭子 (2009). 現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援 京都大学高等教育研究, 15, 79-88.